

第2章 VI 今後の各種事業の取組について

1 研究会・研究部会の各事業

(1)川崎市立小学校国語教育研究会

国語教育研究会の**研究主題「生きてはたらくことばの力を育てる国語教室」**は、国語科での学びが他の教科等でも生かせるようにすることが大切になります。例えばそれは、人とのかかわりをつくりだす力や、必要な情報を探し出し活用する力ともいえます。

国語教育研究会では、国語科の学習を「ことばの教育」として捉え、言葉による見方・考え方を働かせて豊かなことばの使い手を育成するために、「ことばの教育」を通して川崎の子ども達の心を育てることを第一に考えてきました。「生きてはたらくことばの力」の意味には、「確かさ」と合わせて、「豊かさ」や「しなやかさ」といったその子らしい表現も含まれます。

【調査結果を踏まえた取組】

- 年数回開催の常任委員授業では、「目の前の子どもの実態に応じた単元づくり」「資質・能力を明確にした授業」「日常的な言語活動」を手立てとして、研究主題につながる実践の提案をします。
- 学習状況調査の結果を基に、授業改善につながる実践の提案もしていきます。
- 国語科教育研修では、子どもが資質・能力を身に付けることと、言葉の見方・考え方を働かせながら主体的な学びを実現することをどのように両立させることができるのか、また、学習状況調査の結果をどのように授業改善につなげていくのかを考える研修を実施します。

(2)川崎市立小学校算数教育研究会

今年度、川崎市立小学校算数教育研究会の研究テーマは、「考える力が伸びる算数の学びを目指して～数学的な 見方・考え方を働かせて、試行錯誤する(しちゃう)子～」です。また、その研究テーマを達成するために特に力を入れている重点目標は、【学びの自覚と指導の改善】です。

学びの自覚と指導の改善とは、学習の中で子どもが何を学んだのか、または何が分からなかったのかを教師が適切に見取り、次の学習にどのように生かしていくかを考えることです。このことは、授業改善そのものと考えられます。また、この「学びの自覚と指導の改善」を目指すうえで、大切になるのが【振り返り】と【単元計画(案)の修正】となります。子ども主体の学びを実現するためには、子どもの学習状況や変容を見取り、単元計画を柔軟に修正していく必要があるためです。

【調査結果を踏まえた取組】

- 4月の教科総会においては令和7年度の結果を受けて、算数研究会から選出された分析委員会の調査・分析結果から、令和8年度に取り組む重点的な授業改善の手立てやアイデア等を報告することが考えられます。
- 常任委員授業では、教員が川崎市の子どもたちが苦手としている学習等において、思考を生かした柔軟な学習展開ができるよう「学びの自覚と指導の改善」を意識した「単元計画」と子ども同士の学びを充実させるため「振り返り」を手立てとして、研究主題につながる実践の提案をします。
- 実践事例集や夏季研修会等において、学習状況調査の結果を踏まえた授業改善への提案を行います。

(3)川崎市立中学校教育研究会国語科部会

令和7年度の国語科部会の研究主題は、「社会生活に生きる国語力の育成～主体的・対話的で深い学びの実現を 目指して～」であり、これは学習指導要領の目標を土台としたものです。社会生活を送るにあたっては、確かな国語力を身に付けていくことが求められています。そのために、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し、自分の思いや考えを深めていくことを目指していきます。

【調査結果を踏まえた取組】

- 4月の教科総会においては令和7年度の結果を受けて、国語科部会から選出された分析委員会の調査・分析結果から、令和8年度に取り組む重点的な授業改善の手立てやアイデア等を報告することが考えられます。
- 年2回開催の教科主任会においては、部会事業についての理解を図ったり、本調査における国語科としての分析を報告したりする予定です。
- 授業研究会の開催については、本研究部会では、北部地区と南部地区に分かれ、「社会生活に生きる国語力の育成～主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～」という共通テーマのもと、授業研究会に取り組んでいます。本調査の結果を基に、授業改善につながる実践の提案をしていきます。

(4)川崎市立中学校教育研究会社会科部会

今年度の社会科研究会の重点は、「社会的事象を『自分事』としてとらえ、主体的に社会形成に参画しようとする態度の育成～仲間と協働して課題を設定・追究し、自らの言葉で表現する社会科学習を通して～」です。社会科の授業の中で、「社会的事象」と「自分との関係」を考えることやそこに関わっている人たちに共感すること、生徒が学習を進めるうえで、前のめりに取り組んだり、一生懸命考えたりすることを通して、社会的事象を自分事として捉えることができるようにしていくことを大切にしています。そのためにも、生徒自らが課題を立て、追究し、自らの言葉で表現できる単元づくりを行っていけるようにしていきます。そのために、次の3点の手立てを設定しました。

- ①「単元を貫く課題」の設定 ・導入での問題意識が持てる資料 ・生徒自らが課題を設定する
 - ②仲間と協働して追究する場面の設定 ・社会的事象について話し合う ・協働して追究する
 - ③自らの言葉で表現する場面の設定 ・自分が考えたことを話し合う ・単元で学習したことをまとめる
- このような社会科学習を通して、主体的に社会形成に参画する態度、学びを人生や社会に生かそうとする公民としての資質・能力の基礎の育成を目指していきます。

【調査結果を踏まえた取組】

- 4月の部会総会で、調査結果を踏まえた授業の進め方について考えたり、6月の教科主任会で資質・能力の育成を目指した単元デザインと授業改善に関する研修を行ったりすることが考えられます。
- 年4回開催する地区授業研究会においては、本調査の結果を踏まえた授業改善を意識しながら、GIGA端末を効果的に活用した授業や話し合い活動を取り入れた授業を通して、仲間と協働して課題を設定・追究し、自らの言葉で表現しながら解決に迫る単元のあり方に議論することが考えられます。
- これまでの取組によって、ペアやグループによる話し合い活動を取り入れた授業が多く見られるようになりましたが、より一層、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善につながる実践を提案できるようにしていきます。

(5)川崎市中学校教育研究会数学科部会

令和7年度の部会重点目標は、数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、次の3点を重視した指導法の工夫・改善に努めることです。

- ① 概念や原理・法則の理解に裏付けられて生きて働く知識及び技能を習得する(知識及び技能)
- ② 既習の内容を基にして、数量や図形などの性質を見だし、統合的・発展的に考察する力を育てる(思考力, 判断力, 表現力等)
- ③ 問題解決において粘り強く考える態度、問題解決の過程を振り返り評価・改善する態度、多様な考えを認め、よりよく問題を解決する態度を養う(学びに向かう力, 人間性等)

また、生徒が数学の学習に主体的に取り組むことができるように、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感することが大切です。既習が新たな内容や発展的な内容、あるいは、他教科の学習に生かされたり、また、数学が生活や生活における考え方に生かされたりすることで、その実感は色濃くなります。生涯にわたって必要となる数学的な素養を広く身に付けることを目指しています。

【調査結果を踏まえた取組】

- 4月の教科総会、6月と8月に教育委員会と協力し教育課程研究会、2月に教科主任会を予定しています。
- 教科総会においては令和6年度の結果を受けて、数学科部会から選出された分析委員会の調査・分析結果から、令和7年度に取り組む重点的な授業改善の手立てやアイデア等を報告することも考えられます。
- 北部地区と南部地区の2チームで進められている「生徒が主体的に数学的活動に取り組む授業づくり」をテーマにした研究を、調査・分析結果を生かした授業づくりについて考える一助として活用することも考えられます。
- 8月の教育課程研究会、2月の教科主任会において、本調査の数学科の分析を報告する予定です。

(6)川崎市立中学校教育研究会理科部会

中学校教育研究会理科部会では、「科学的な探究の過程を通して、個別最適な学び・協働的な学びを目指し、一人ひとりの子どもの資質・能力を育む理科教育」を目標に研究を進めています。探究の過程を通して、生徒が理科用語を使いながら思考したり、議論したりしながら科学的な概念を構築するよう、教師の意識的な授業改善に取り組んでいます。

これらを継続・発展させていくために、未知の状況にも対応できる思考力, 判断力, 表現力等を育成するとともに、実社会で生きて働く知識及び技能の習得を図る場面では、理科用語を使いながら、日常生活や身近な事象とのつながりを意識した概念的な理解を図り、学びを人生や社会に生かそうとする授業改善を行っていくことが大切であると考えます。

【調査結果を踏まえた取組】

- 教科部会総会では、本調査を基にした報告及び授業改善例を紹介するとともに、実践指導事例集の内容を紹介する中でも、課題や重点を踏まえた授業づくりや事例等を紹介します。
- 理科部会では、4つの研究推進委員会で研究を推進しており、4地区の地区授業研究会とタイアップをしながら研究の充実と波及に取り組んでいます。これらの機会では、引き続き本調査の結果も踏まえながら、川崎の生徒が科学的に探究する理科教育の研究を推進していきます。

(7)川崎市立中学校教育研究会英語科部会

令和7年度の川崎市立中学校教育研究会英語科部会の研究主題は「自学び合いを通して、表現豊かに考えや気持ちを伝え、他者とのつながりを大切にする生徒の育成～学びの連続性を生かした授業の実践～」です。小学校からのつながりや単元内でのつながりなど学びの継続性を意識した授業づくりを進めています。また、コミュニケーションの目的や場面、状況を設定し、言語活動を通して既習表現を活用させながら生徒のコミュニケーションを図る資質・能力の育成を図っていきます。

【調査結果を踏まえた取組】

- 実践事例集の中で本調査の結果を踏まえた授業づくりや実践事例を作成し、教科部会総会や教育課程研究会で周知していくことが考えられます。
- 北部・中部・南部の市内3地区で行われる地区別研究会等を通して、本調査の結果を共有したり、授業実践に活用したりして、主題の達成に取り組んでいくことが考えられます。

2 教育委員会の各事業

調査結果から、かわさき教育プランで示された資質・能力の育成に向け、次の事業において取り組んでまいります。

(1)「拡大要請訪問」

- 調査結果を踏まえ、各学校が学習指導の課題を把握・分析し、カリキュラム・マネジメントの推進や教課程の改善に取り組む中で、更なる授業の改善・充実に向けて指導・助言します。
- 学校教育目標の実現に向けて、各教科等において児童生徒の資質・能力の育成に向けた「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を一層推進します。
- 授業後の分科会においては、学習指導要領に基づいた授業計画(学習指導案作成)から、各学校の児童生徒の状況に即した授業実践と、各学校の調査結果を合わせ、授業者等とともに、授業改善の手立てについて考えます。
- 全体会においては、校内研修などを通して、調査結果の分析にて明らかになった課題等について着目し、授業改善の手立てについて具体的に助言します。また、単元や題材のまとまりを通して資質・能力をバランスよく育ていくために、児童生徒の状況に即した単元や題材をデザインする際の具体的なポイント等を伝えていきます。

(2)「各種要請訪問」

- 調査結果の成果と課題を踏まえ、各学校が指導改善に取り組む中、各教科等の目標達成に向けた授業改善や学校が個別に求める支援ニーズを捉え、それに対応した指導・助言をしていきます。
- 「様々な知識や技能を関連付け、目的や場面に応じた判断をすること」が課題として見受けられた場合、その手立てとして、「教える教師から、授業をファシリテートする教師への転換」を促し、児童生徒が各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう場面を設定することを助言します。

(3)「実践事例集の作成」

- 本調査の同一母集団の経年比較を踏まえた結果について、確かな学力の育成を目指し、学習指導要領に示す内容が児童生徒一人ひとりに確実に身に付いているかどうかを適切に分析・把握し、その後の学習指導の改善に生かしていくよう研究(部)会の協力のもと研究し、年度末の発行に向けて編集します。
- 調査結果でみられた「階層別の平均正答率の差が大きい」ことを踏まえ、児童生徒一人ひとりの特性や学習進度、学習到達度、児童生徒の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じて、適切な学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、児童生徒自身の学習が最適となるよう調整していく具体的な実践事例を示していきます。
- 基礎的・基本的な学習内容はおおむね身に付いており、資料から情報を読み取り、それらを関連付けて考えたり説明したりすることには課題が見られるため、児童生徒一人ひとりの学びを深めたり主体性を引き出したりといった工夫を重ねながら、確実な習得を図ることができる実践事例を示していきます。

(4)「ライフステージ研修」

○調査結果から成果と課題を捉え、校長のリーダーシップのもと、学校運営の状況や課題を全教職員で共有し、各種データ等を効果的に活用するなど、RPDCAサイクルを機能させた検証改善の質をさらに高めるような内容となる研修を実施していきます。

○ライフステージに応じた役割を明確にして、互いに高め合う意識を共有し人材育成に全教職員が関わることができるようにします。

○ステージⅠ・Ⅱの学習指導の研修等で、実際の指導を参観して指導の意図を共有することにより、指導方法や知識だけでなく、教師としての志や姿勢も共有できるようにします。

(5)「教育課程研究会」

○夏季休業中に各教科等で開催する第2回教育課程研究会では、調査結果を踏まえ、学習指導等の改善のポイントについて伝達し、課題解決へ向けた具体的な方策について助言します。

○各学校においては、分析で見られた課題について検証し、課題解決に向けて、児童生徒の学びの過程を質的に高めていくとともに、「主体的・対話的で深い学び」を軸としながら、実態に即した授業改善の工夫をすることで、各学校における児童生徒の資質・能力の育成につなげます。

第3章 教育委員会事務局各部署による分析

第3章 I 政策推進

教育政策室(政策推進担当)

キャリア在り方生き方教育の視点 「自分をつくる」

質問番号:【123】(小4・5)、【126】(小6)、【139】(中1)、【144】(中2・3)】
質問内容:将来の夢や目標を持っている。
<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	86.9	87.1	87.6	88.6	84.3	2.8
令和7年度・小5	84.5	84.0	83.9	84.7	85.4	-1.4
令和6年度・小4	86.6	86.9	87.3	88.4	83.6	3.3
令和7年度・小6	80.2	80.1	79.6	79.7	81.7	-1.6
令和6年度・小5	84.1	82.5	83.2	85.5	85.4	-2.9
令和5年度・小4	86.8	87.1	87.7	87.8	84.5	2.6
令和7年度・中1	80.8	78.4	80.2	82.3	82.4	-4.0
令和7年度・中2	69.0	68.0	68.9	68.8	70.6	-2.6
令和6年度・中1	80.1	79.3	79.3	80.0	81.9	-2.6
令和7年度・中3	69.0	68.8	68.8	70.1	68.7	0.1
令和6年度・中2	69.4	68.9	68.3	69.0	72.1	-3.2
令和5年度・中1	80.0	77.4	80.4	80.3	82.1	-4.7

質問番号:【126】(小4・5)、【129】(小6)、【142】(中1)、【147】(中2・3)】
質問内容:自分には、よいところがあると思う。
<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	85.0	88.0	87.4	85.6	78.9	9.1
令和7年度・小5	82.3	86.3	83.3	82.3	77.4	8.9
令和6年度・小4	83.9	88.0	85.5	83.9	78.0	10.0
令和7年度・小6	79.3	82.1	80.0	79.3	76.1	6.0
令和6年度・小5	80.9	84.6	82.0	80.0	77.0	7.6
令和5年度・小4	84.5	87.5	86.1	84.5	79.9	7.6
令和7年度・中1	80.0	82.1	81.9	79.2	77.3	4.8
令和7年度・中2	76.7	79.9	78.4	75.9	73.0	6.9
令和6年度・中1	78.3	81.2	80.3	77.4	74.4	6.8
令和7年度・中3	76.1	79.7	77.0	75.8	72.5	7.2
令和6年度・中2	74.3	77.9	75.5	74.2	69.9	8.0
令和5年度・中1	75.5	78.2	75.5	76.1	72.3	5.9

キャリア在り方生き方教育の視点 「自分をつくる」

質問番号:【123】(小4・5)、【126】(小6)、【139】(中1)、【144】(中2・3)】

質問内容:将来の夢や目標を持っている。

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

【分析結果】

中学2年生の結果を1年生時の結果と比較すると約10ポイント下回っており、これは昨年度と同様の結果となります。中学2年生になり、現実的な中学卒業後の進路選択への意識が強くなっていくことで、様々な「夢」や「目標」を思い描きにくくなることも考えられます。

また、小学4年生と中学3年生以外は、A層よりD層の肯定的な回答の割合が高く、夢や目標をもつことは、学習の理解度に比例するものではないと考えられます。

質問番号:【126】(小4・5)、【129】(小6)、【142】(中1)、【147】(中2・3)】

質問内容:自分には、よいところがあると思う。

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

【分析結果】

昨年度と同程度の結果ですが、小学6年生の結果を経年で見ると、学年が上がるにつれて肯定的な回答の割合が下がっています。成長に伴い客観的に自分を見る力が育ち長所とともに課題にも気付くことなどが要因として考えられます。一方中学3年生では、学年が上がるにつれて肯定的な回答の割合が上がっています。経験の中で「よさ」を認める視点が增える、自己への新たな気付きを得る、人がもつ「よさ」について考えが広がることなどが考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】

「好き」や「得意」を踏まえ、「就きたい職業」に限らず、「なりたい自分の姿」から将来の夢や目標を思い描くことができるように、キャリア形成を支援していくことが大切です。また、将来の夢や目標は、「自分らしさ」を発揮していくことと深く関連するものだと気付くような取組の工夫が大切です。「キャリア在り方生き方ノート」には、自分のよさに気付くページや、自分の個性を見つめながら将来を考えるページなどがあります。また、「なりたい自分の姿」を描くには、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、変容や成長を自己評価し、自分を見つめられるようにキャリア・パスポートが活用できます。より有効な活用時期や場面を考え、年間計画等に明確に位置付けることも大切です。

教育政策室(政策推進担当)

キャリア在り方生き方教育の視点 「みんな一緒に生きている」

質問番号:【122】(小4・5)、【125】(小6)、【138】(中1)、【143】(中2・3)】
質問内容:学級みんなで協力して何かをやりとげうれしかったことがある。
<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	89.2	91.8	91.4	89.4	84.4	7.4
令和7年度・小5	88.9	91.2	90.2	89.4	84.8	6.4
令和6年度・小4	89.0	91.2	91.2	90.2	83.5	7.7
令和7年度・小6	88.6	89.0	89.6	88.7	87.2	1.8
令和6年度・小5	90.0	91.2	90.7	90.4	88.0	3.2
令和5年度・小4	89.9	92.0	91.1	90.6	85.8	6.2
令和7年度・中1	88.4	89.7	90.1	88.3	85.5	4.2
令和7年度・中2	86.3	89.0	87.9	85.8	82.7	6.3
令和6年度・中1	87.4	89.9	88.9	87.1	83.7	6.2
令和7年度・中3	86.8	88.6	88.2	87.6	83.5	5.1
令和6年度・中2	85.7	86.6	87.1	86.8	82.7	3.9
令和5年度・中1	87.0	88.9	87.8	87.5	83.6	5.3

質問番号:【125】(小4・5)、【128】(小6)、【141】(中1)、【146】(中2・3)】
質問内容:人が困っているときは進んで助けている。
<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	91.4	93.7	93.7	91.7	86.7	7.0
令和7年度・小5	91.7	93.4	92.8	91.2	89.5	3.9
令和6年度・小4	91.9	93.6	93.1	93.2	87.6	6.0
令和7年度・小6	92.2	93.2	92.4	93.3	90.1	3.1
令和6年度・小5	92.5	93.9	93.1	93.5	89.8	4.1
令和5年度・小4	92.1	94.4	92.9	92.9	87.9	6.5
令和7年度・中1	93.1	92.2	94.9	93.7	91.8	0.4
令和7年度・中2	90.1	90.1	91.9	90.5	88.0	2.1
令和6年度・中1	92.3	93.2	92.7	92.5	91.2	2.0
令和7年度・中3	89.8	89.8	90.0	90.4	89.6	0.2
令和6年度・中2	90.0	90.2	91.0	90.7	88.6	1.6
令和5年度・中1	91.5	92.1	91.7	92.4	89.6	2.5

キャリア在り方生き方教育の視点 「みんな一緒に生きている」

質問番号：【122】(小4・5)、【125】(小6)、【138】(中1)、【143】(中2・3)
質問内容：学級みんなで協力して何かをやりとげうれしかったことがある。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
肯定的な回答の割合が、全学年85%以上を示しています。また、小学6年生の結果では、学年が上がるにつれてA－D層の差が小さくなっています。高学年として、学級全体の協力がより必要な行事や授業の活動等が増える中で、一人ひとりの児童が学級の一員として所属感や充実感を感じていることが考えられます。中学3年生の経年で見た結果では、数値上では大きな変容は見られず、中学1、2年生については、今後の変化に注視する必要があります。

質問番号：【125】(小4・5)、【128】(小6)、【141】(中1)、【146】(中2・3)
質問内容：人が困っているときは進んで助けている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
中学3年生以外は、肯定的な回答の割合が90%以上(中3は89.8%)を示しており、「困っている人を進んで助ける」という意識が高い傾向にあることが読み取れます。
また、小学4年生のA－D層の差が他の学年と比べて大きいことが読み取れます。小学校と中学校の結果を比較すると中学校の方がその差が小さいことから、成長に応じ、どの層もより自覚的に他者への気遣いやサポートを行うようになっていることが考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】
どちらの質問も全学年の肯定的な回答の割合が85%を超えていることから、引き続き、互いの人格を尊重し、協力、協働して社会を積極的に形成していく力を伸ばしていくことが大切です。
学級で協力して何かをやりとげる活動をする際には、例えば、皆が納得できる目標や過程に着目した目標を決めたり、互いのよさや頑張りを随時振り返り認め合ったりするなど、達成感や充実感を味わえるよう指導の工夫を図っていくことも大切です。また、かわさき共生＊共育プログラムのエクササイズなども豊かな人間関係づくりに効果的です。

教育政策室(政策推進担当)

キャリア在り方生き方教育の視点「わたしたちのまち川崎」

質問番号:【130】(小4・5)、【133】(小6)、【146】(中1)、【151】(中2・3)】
質問内容:自分の住んでいる町がすきである。
<肯定的な回答割合と4層分析データから>

質問番号:【132】(小4・5)、【135】(小6)、【148】(中1)、【153】(中2・3)】
質問内容:地域や社会をよりよくするために何をすべきか考えたことがある。
<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	92.4	94.7	93.2	93.3	88.4	6.3
令和7年度・小5	91.1	91.7	92.2	91.6	88.9	2.8
令和6年度・小4	92.3	95.0	93.4	92.7	88.0	7.0
令和7年度・小6	88.4	87.2	89.4	89.1	87.6	-0.4
令和6年度・小5	91.4	92.6	92.1	91.6	89.4	3.2
令和5年度・小4	91.7	93.3	92.7	91.9	88.9	4.4
令和7年度・中1	88.8	88.5	89.8	89.1	87.9	0.6
令和7年度・中2	85.1	85.5	85.7	85.0	84.4	1.1
令和6年度・中1	88.2	90.3	89.2	87.9	85.6	4.7
令和7年度・中3	83.5	84.0	83.5	84.6	82.5	1.5
令和6年度・中2	84.5	83.3	85.5	85.9	83.5	-0.2
令和5年度・中1	86.6	87.9	86.9	87.4	84.2	3.7

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	67.6	71.3	67.9	67.0	64.4	6.9
令和7年度・小5	64.3	70.9	64.6	63.4	58.4	12.5
令和6年度・小4	69.8	73.6	69.4	68.9	67.2	6.4
令和7年度・小6	65.6	69.7	67.7	65.5	60.0	9.7
令和6年度・小5	67.7	72.6	66.5	67.6	64.2	8.4
令和5年度・小4	69.1	71.0	69.0	68.4	68.2	2.8
令和7年度・中1	64.4	71.6	66.4	60.8	59.0	12.6
令和7年度・中2	53.6	59.5	57.1	50.9	47.1	12.4
令和6年度・中1	63.3	69.8	65.5	61.9	55.9	13.9
令和7年度・中3	49.5	51.8	52.2	49.4	44.9	6.9
令和6年度・中2	52.4	55.0	54.2	52.5	48.2	6.8
令和5年度・中1	62.2	68.5	63.9	61.5	54.9	13.6

キャリア在り方生き方教育の視点 「わたしたちのまち川崎」

質問番号:【130】(小4・5)、【133】(小6)、【146】(中1)、【151】(中2・3)】
質問内容:自分の住んでいる町が好きである。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】

昨年度と同程度の結果であり、肯定的な回答の割合は、全学年で83%以上を示しています。
各学年の結果を経年で見ると、学年が上がるにつれて肯定的な回答の割合が前の学年をやや下回るとともに、A－D層の差が小さくなっていく傾向が見られます。成長に伴い、学習や生活経験の中で、自分の住んでいる町に対して児童生徒一人ひとりが、より多様な意見をもつようになっていくことが考えられます。

質問番号:【132】(小4・5)、【135】(小6)、【148】(中1)、【153】(中2・3)】
質問内容:地域や社会をよりよくするために何をすべきか考えたことがある。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】

昨年度と同様に、質問130と比べると肯定的な回答の割合が下回っていることから、地域に対して好感をもっている児童生徒がいないことが考えられます。
また、中学2年生と3年生の結果では、いずれも2年生時の結果が1年生時の結果より約10ポイント下回っています。中学生という新しい生活の中で、地域や社会と自分との関わりを考える機会に変化が生じていることも考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】

社会参画の意識を高めていくためには、自分の力で現実の社会問題を解決できるという、社会の創り手としての意識を育てることが大切です。そのために、地域や社会と関わりながら進める学習や、川崎市制100周年を契機にした取組などを生かしながら、「わたしたちのまち川崎」の視点を踏まえた教育活動の充実を図ります。その際、「キャリア在り方生き方ノート」にある、地域について扱っているページが活用できます。また、学校として、コミュニティ・スクールを活用した地域連携を推進するとともに、児童生徒が社会や世界とつながり、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していけるようカリキュラム・マネジメントの充実を図ることが大切です。

教育政策室(政策推進担当)

SOSの出し方・受け止め方教育 (かわさき共生＊共育プログラム)

質問番号:【127】(小4・5)、【130】(小6)、【143】(中1)、【148】(中2・3)
質問内容:不安やなやみ、ストレスがあるとき、だれかに相談することができている。

<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	67.3	69.3	67.9	67.5	64.2	5.1
令和7年度・小5	64.0	66.5	65.0	62.0	62.6	3.9
令和6年度・小4	68.6	70.9	69.0	69.6	64.6	6.3
令和7年度・小6	63.4	65.1	63.3	63.6	61.9	3.2
令和6年度・小5	64.8	67.4	64.9	64.6	62.3	5.1
令和5年度・小4	69.5	71.0	69.9	69.5	67.4	3.6
令和7年度・中1	66.1	67.6	66.3	66.4	64.4	3.2
令和7年度・中2	66.5	69.7	68.7	64.6	63.3	6.4
令和6年度・中1	65.7	68.4	67.2	65.0	62.4	6.0
令和7年度・中3	68.5	71.5	69.7	69.2	64.5	7.0
令和6年度・中2	65.2	67.3	66.9	65.3	61.6	5.7
令和5年度・中1	65.1	66.9	66.7	65.3	61.5	5.4

【分析結果】

小学生では、学年が上がるにつれて肯定的な回答の割合が下がっているのに対し、中学生では上がっていることが読み取れます。成長の中で、自分のことを率直に相談しづらくなる側面と、相談相手が増えたり相談する力が向上したりする側面があることが考えられます。

また、質問128(人権・多文化共生教育担当のページに掲載)の「困ったとき、なやんだときは、身近な大人が話を聞いてくれる。」という質問項目の肯定的な回答の割合が小学4年生から中学1年生で80%以上、中学2、3年生で78%以上であることを踏まえると、大人に話は聞いてもらえているが、誰かに相談はできていないと感じている児童生徒がいることが考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】

「かわさき共生＊共育プログラム」に位置付けている「SOSの出し方・受け止め方教育」を引き続き推進します。エクササイズを通して学んだ、自分の心を見つめることやSOSの出し方などを実生活に生かそうとする意識を育てるとともに、子どもも大人もSOSを受け止める「受容傾聴」の姿勢などについて理解し、安心して相談できる環境づくりをしていくことが大切です。

第3章 II 人權・多文化共生教育

教育政策室人権・多文化共生教育担当

質問番号:【129(小4・5)132(小6)145(中1)150(中2・3)】
質問内容:自分のことは自分で決められるよう、身近な大人が助けてくれる。
<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	84.0	88.0	86.1	82.8	78.9	9.1
令和7年度・小5	85.1	89.7	87.3	84.1	79.4	10.3
令和6年度・小4	84.8	89.0	85.6	84.6	79.6	9.4
令和7年度・小6	86.4	89.4	87.9	86.6	81.8	7.6
令和6年度・小5	86.2	89.5	88.1	85.7	81.5	8.0
令和5年度・小4	84.4	87.8	85.9	83.8	80.0	7.8
令和7年度・中1	88.1	91.9	89.5	87.2	83.7	8.2
令和7年度・中2	86.2	90.4	89.0	85.1	80.4	10.0
令和6年度・中1	81.1	83.1	84.1	80.8	76.4	6.7
令和7年度・中3	85.9	90.4	87.0	86.7	80.1	10.3
令和6年度・中2	84.1	87.3	86.4	84.2	78.7	8.6
令和5年度・中1	85.8	89.3	86.5	86.8	80.7	8.6

【分析結果】

質問129について、経年変化に着目すると、小・中学生共に学年が上がるに従ってポイントが上昇していることがわかります。中学生は2年生で一度下がっている学年もありますが、基本的に上昇しています。この上昇については、学年が上がるに連れて、周囲の大人とコミュニケーション

が取れるようになり、相談したり、人に助けられたりする経験から、身近な大人の存在を実感する児童生徒が増えていると考えられます。特に、中学校3年生では自分の進路選択を保護者や学校の先生等と共に考えながら決定するため、多数の児童生徒が実感していると考えられます。

質問番号:【128(小4・5)131(小6)144(中1)149(中2・3)】
質問内容:困ったとき、なやんだときは、身近な大人が話を聞いてくれる。
<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	81.2	84.3	82.9	80.9	76.7	7.6
令和7年度・小5	81.2	84.9	83.0	80.4	76.3	8.6
令和7年度・小6	81.1	83.2	81.6	81.9	78.0	5.2
令和7年度・中1	81.6	85.0	82.5	81.4	77.3	7.7
令和7年度・中2	78.9	82.1	81.6	78.1	74.2	7.9
令和7年度・中3	78.1	81.0	79.2	78.2	74.7	6.3

【分析結果】

質問128について、今年度の結果から考えると、学年が上がるに従って、ポイントが低下していることがわかります。この低下については、学年が上がるに連れて、大人に相談するのではなく、自分で考えたり、身近な友だちに相談したりする割合が増えていると考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】

児童生徒が身近な大人に相談しやすい環境を整えるには、的確な児童生徒理解が求められます。児童生徒、保護者に対して、教職員が積極的に、生徒指導の方針や意味などについて伝え、理解を進めることや、教職員が児童生徒の心の痛みに気づき、一人ひとりの人権が尊重されているかを判断できる確かな人権感覚を身に付けていくことが、児童生徒の安心感や教職員への信頼にもつながっていきます。

そのために、子どもに関わる大人が児童生徒の声を受容・傾聴し、相手の立場に寄り添って理解しようとする共感的理解が重要になります。

さらに、児童生徒の意見表明権に目を向けて考えてみると、例えば「考えや意見を表現する」ことには、「話すこと」に加えて「書くこと」も含まれます。また「考えや意見を表現しない」ことも意見表明権の現れだとされています。「考えや意見を表現しない」児童生徒については、その背景を想像して関わる教職員の姿勢そのものが、信頼関係を築く大切な要素になっていきます。

・「子どもの権利学習」の実施

「川崎市子どもの権利に関する条例」に示されている「**7つの権利**」について知り、考え、深めることを通して、権利の実現を目指すことは大切です。

特に、身近な大人が子どもの年齢や成長に応じて対話し、相談しやすい環境を整えるなど適切なサポートを行うことは、子どもの「7つ権利」の実現に大きくつながります。子どもに関わる全ての大人が、子どもを「全面的な権利の主体」としてとらえ、子ども自身の人間性を尊重することが求められます。

子どもの権利学習資料



小学校低学年用
「かがやき」



小学校中高学年用
「みんな輝いているかい」



中学高校生用
「わたしもあなたも輝いて」

- ※参考 1. 人権教育の指導方法等の在り方について(第三次とりまとめ)2008年 文部科学省
2. 生徒指導提要 2022年 文部科学省

第3章 Ⅲ 情報・視聴覚センター

情報・視聴覚センター

質問番号:【154】
質問内容:GIGAたん末は学習の役に立つと思う。
<肯定的な回答割合と4層分析データから>

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	91.8	95.2	93.7	92.1	86.2	9.0
令和7年度・小5	92.8	94.3	94.8	93.6	88.5	5.8
令和6年度・小4	91.9	95.6	93.5	92.4	86.1	9.5
令和7年度・小6	93.3	93.2	94.3	94.2	91.5	1.7
令和6年度・小5	92.7	94.0	94.4	93.3	89.1	4.9
令和5年度・小4	91.4	94.0	92.7	92.5	86.2	7.8
令和7年度・中1	93.2	94.1	95.1	93.1	90.5	3.6
令和7年度・中2	90.4	90.7	91.8	91.5	87.6	3.1
令和6年度・中1	93.1	94.0	94.9	93.9	89.5	4.5
令和7年度・中3	90.1	90.5	90.1	91.0	88.9	1.6
令和6年度・中2	89.0	90.6	90.0	89.9	85.6	5.0
令和5年度・中1	91.3	92.8	92.5	92.1	87.8	5.0

【分析結果】
同一母集団のA-D層の差は年度を追うごとに小さく、中1中2間を除き、川崎市、C層、D層の数値が増加していた。つまり、A-D層の差の減少はD層の上昇によるところが大きいことが分かる。

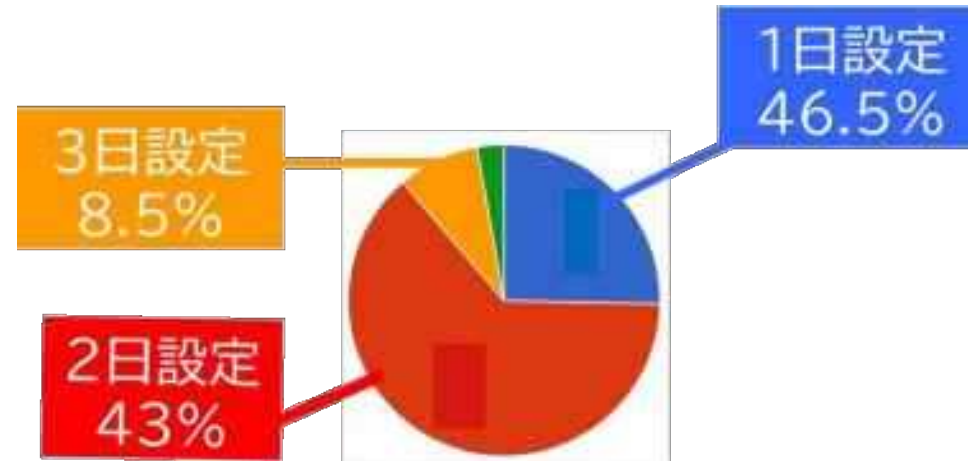
【実態に応じた取組の工夫】
GIGA端末の学習への有用性について、同一母集団のA-D層の差は経年で見ると小さくなっている。D層が他の層よりも大きく上昇しており、このことがA-D層の差の減少に影響している。これは、D層の子どもほど、低い学年においてGIGA端末を学習のために有効に活用できていない状況と考えられるが、学年が上がるにつれてGIGA端末の活用が進むことで、情報活用能力が高まり、その他の層よりも遅れて有用性の実感がわいてきているものと予想される。
つまり、早期からGIGA端末の学習への恩恵を受けられるようにするためにも、タイピングやインターネット検索等の初期指導や比較などの情報の整理分析の方法など、GIGA端末を活用した学び方をしっかりと身に付けられるように指導することが重要であると言える。したがって、例えば、総合的な学習の時間を軸としながら、各教科での学びの中で教科ごとの見方考え方を働かせながら学びを進めていく中で、GIGA端末を活用しながら、ダイナミズムのある学びの中で、情報活用能力を育成するといったカリキュラム・マネジメントが必要であると言える。
また、中1中2間の値の減少は小学校と中学校の間のGIGA端末を活用した学びのギャップがあることが要因と考えられる。校種を越えた好事例の横展開を一層講じていく必要がある。

第4章

9月26日担当者説明会とモデル校の取組より

第4章 I 担当者説明会

実施日について



- 意識調査だけ別日設定
- 各学年別日設定
- 教科調査の前に意識調査を実施

動画、音声データについて

国語と英語の音声

CDのみ→CD又はデータ

GIGA端末で
再生可能

実施に関する解説動画

冊子のみ→冊子又は動画

受検票
意識調査
教科調査

教員用
児童生徒用

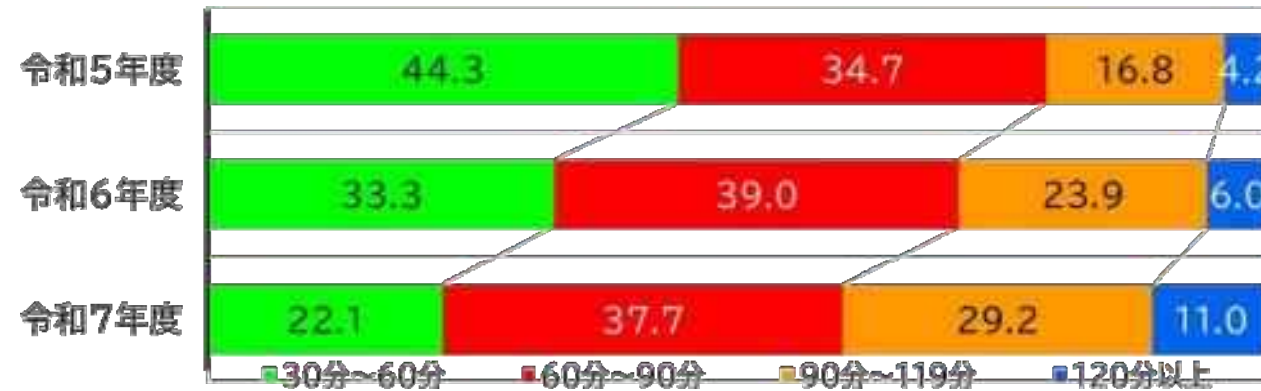
学校全体で調査結果を活用する時期について

通年活用モデルにおける4月～7月は、前年度の取組(授業改善の手立て)を引き継ぐ等の取組が有効。



- 各学校で設定した意識調査から抽出した項目の再調査を実施
- 年間の振り返り & 次年度への引き継ぎ

校内分析研修会の時間設定について



- 30分～60分と回答した学校も分析は事前に済ませている
- より詳細な分析や授業改善に向けての協議に注力

校内分析研修会について

今年度の工夫

- これまでの授業内容について、個人、学年で振り返ることと調査結果の分析をもとに夏季休業明けの授業を具体的にどのようにしていくのか、考える時間を多く取った。
- 調査結果を経年で確認することに加え、過去の分析研修会の記録を資料として提示し、分析結果や手立てについても経年で確認した。

研修会を終えた先生方の意見

- 低学年からの積み重ねが重要であると分かった。
- 教員が感覚でなんとなくイメージしていることが、客観的なデータとして提示されたことにより、改めて具体的な授業づくりのイメージを持つことができた。

校内分析研修会における共通事項について

- 実施学年、実施教科のみの分析にとどまらず、学校全体で取り組むこと。
- 実態に応じてデータを焦点化することで、意識調査の分析を効率的に行い、手立ての検討し、実施すること。

第4章 Ⅱ モデル校の事例

【小学校の事例】

第2学年における学習状況調査を活用した実践報告

①手立てについて

【実践してきた主な手立て】

A 実態把握

- ・昨年度の学年からの引き継ぎ
- ・4月からの児童の見取り
- ・本校の学習状況調査の結果(令和6年度)
- ・学年での話し合い など

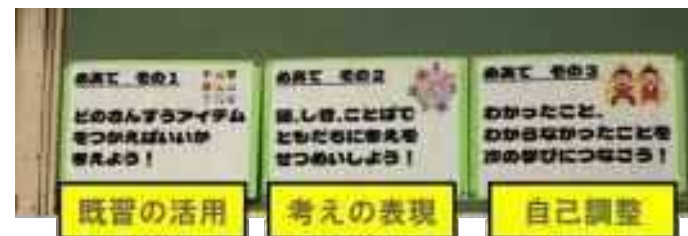
B 重点項目の設定

児童の実態 ⇨ 抽出項目・重点項目を設定(年間取組シート)

- ・新しい問題を解くときに、これまでに習ったことをどうやって使えば解けそうか、考えるようにしている。
- ・自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えることができる。
- ・その日のめあてを決めて、授業や家で勉強に取り組んでいる。

C 「重点項目」を児童と共有

- ・教室掲示の例→



いつでも視覚的に確認できる環境作り



・振り返りシートの活用

重点項目を
めあてとして設定

達成度を
3段階で自己評価

学びについて
ふりかえりを記述

振り返りシート	達成度	学びについて
重点項目①「既習の活用」	○ ● △	
重点項目②「学びの振り返り」	○ ● △	
重点項目③「学びの振り返り」	○ ● △	
重点項目④「学びの振り返り」	○ ● △	
重点項目⑤「学びの振り返り」	○ ● △	
重点項目⑥「学びの振り返り」	○ ● △	
重点項目⑦「学びの振り返り」	○ ● △	
重点項目⑧「学びの振り返り」	○ ● △	
重点項目⑨「学びの振り返り」	○ ● △	
重点項目⑩「学びの振り返り」	○ ● △	

②実践の様子について

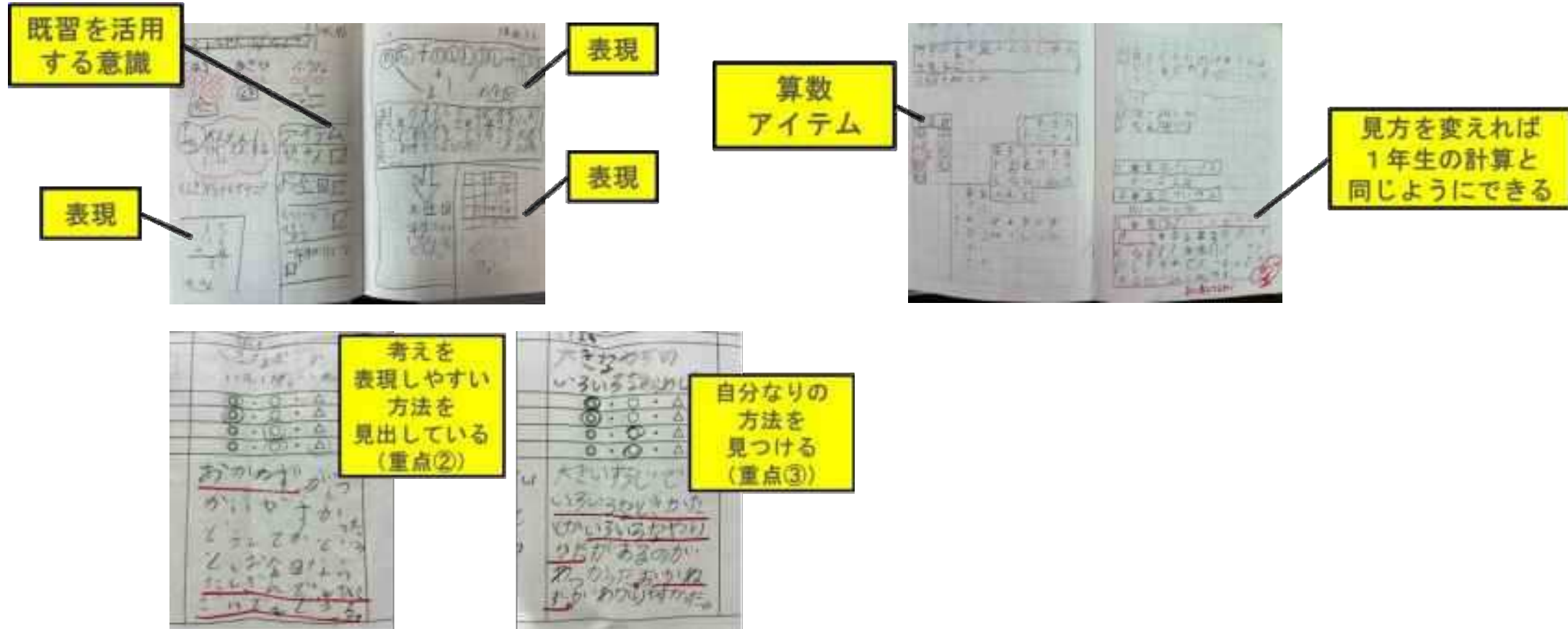
・重点項目①「既習の活用」という土壌がなかったスタート

なんとなく
さくらんぼ算
位ごとに
分けていない
(数学的な見方・考
え方を働かせていない)

重点項目を
学び方の
めあてとして
はじめて共有




・既習(算数アイテム)を活用しようとする姿(重点①)



③成果と今後の取組について

【成果】

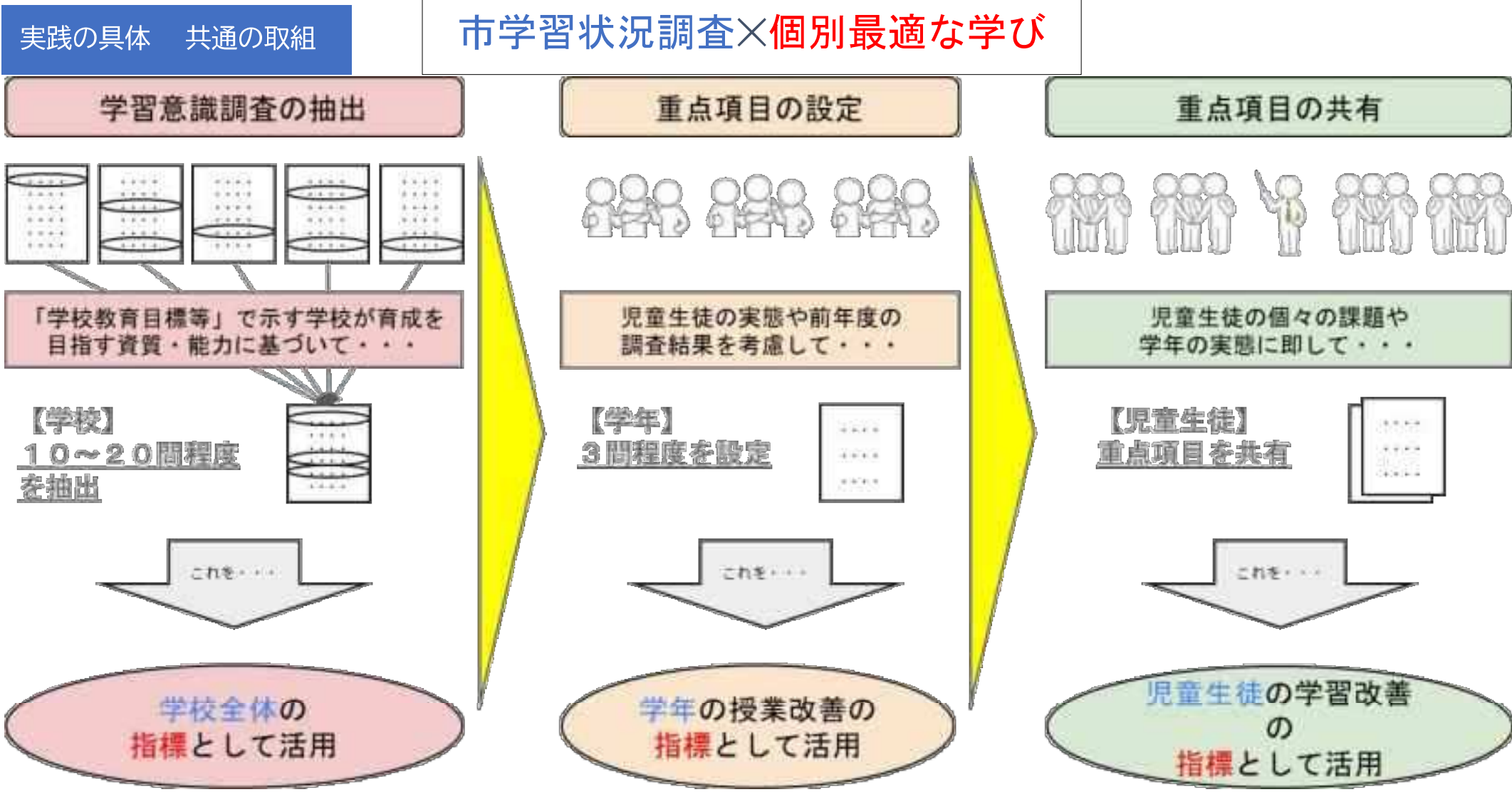
- ・児童自ら既習を活用する意識が高まってきた
- ・図を用いて説明、学びを振り返ろうという姿も増えた
- ➡設定した3つの重点項目について、変容が見られた

【今後の取組】

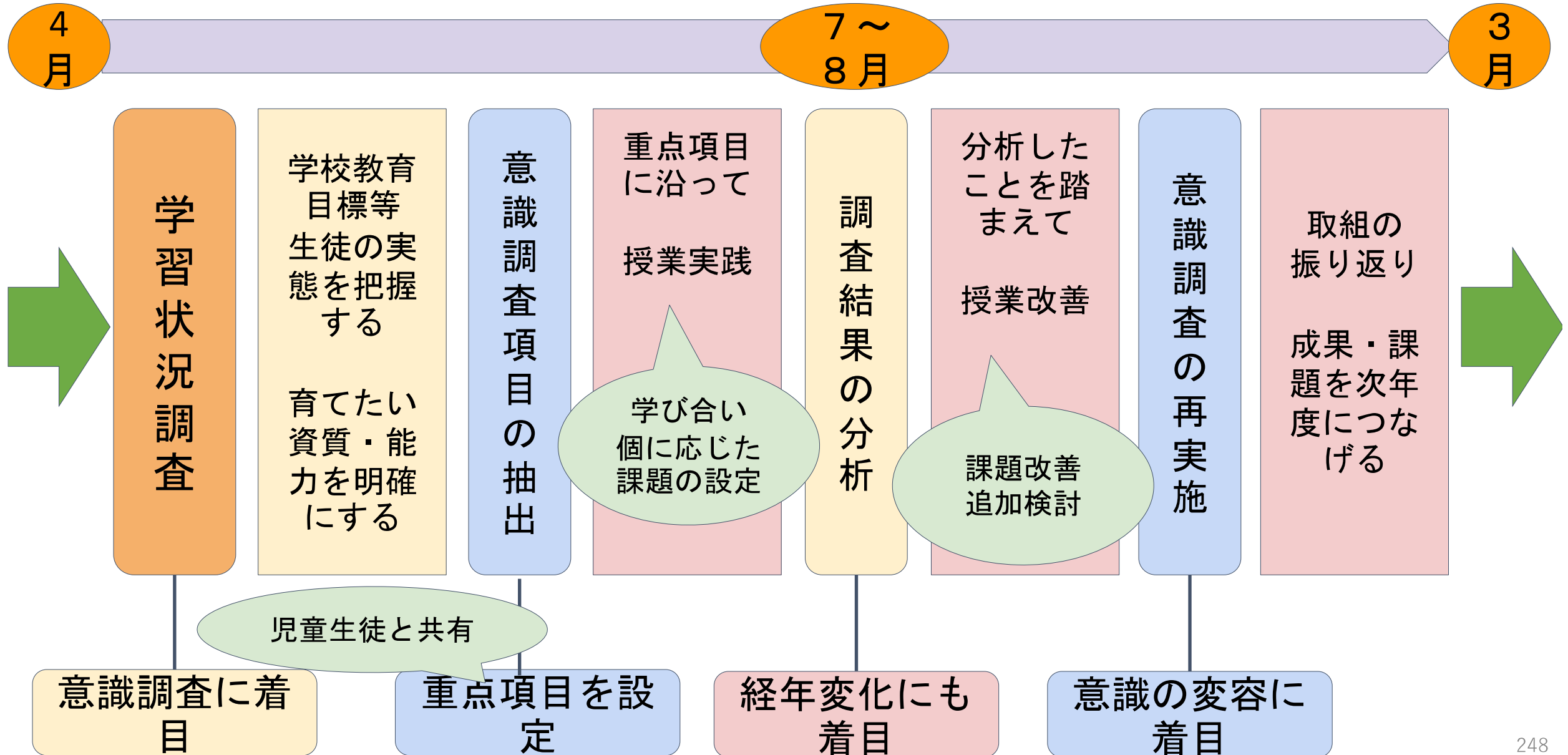
- ・後期に再度アンケートを実施し、数値としても客観的な変容が見られるのか調査➡手立ての再考
- ・この取り組みを継続するための、学校全体の体制、次年度の学年団に伝える仕組みづくりの見直し

【中学校の事例】 学習状況調査を活用した取組

学習の指標を自覚して学ぶ児童生徒の姿を目指して
—川崎市学習状況調査の結果を活用した学習改善に向けた取組—



取組の年間計画



Ⅱ-3 実践の検証 (1)研究の手立てから

個別最適を意識した授業(D中学校7月)

具体的な手立て

- ・ペアワーク・グループワークの充実
→ペアになり、教え合いやすい座席の配置に配慮
- ・GIGAを使い学び合い
→気づきや振り返りをリアルタイムで共有

個別最適を意識した授業(D中学校10月)

具体的な手立て

- ・ペアワーク・グループワークの充実
→わかること、わからないことを説明できるように
- ・GIGAを使い学び合い
→一人スライド友達の考えを途中参照

①重点項目の児童生徒との共有

→日々の授業や学校生活での行動に**肯定的な場面**があった。

②単元計画の児童生徒との共有

→ゴールを示すことで行動や考えが焦点化され、**迷いやぶれが少なくなっている場面**があった。

③個別最適な学びを意識した授業実践

→**協働的な活動の設定、GIGA端末の活用が効果的に作用した場面**があった。

それぞれの手立てによって、**主体的な姿**が見られた。

市学習状況調査の結果を児童生徒の学習の指標として活用することは**学び方を意識して前向きに学習に取り組む姿**につながる

令和7年度 川崎市学習状況調査 全市報告書

令和7年11月発行

発 行:川崎市教育委員会・川崎市立小学校長会・川崎市立中学校長会

連絡先:川崎市総合教育センター カリキュラムセンター

〒213-0001 川崎市高津区溝口6-9-3

TEL 044-844-3722

FAX 044-844-3727